

◆訂正◆

本誌20巻4号(特集：経鼻内視鏡は本当に楽なのか?)：「経鼻内視鏡を始めるにあたっての使い分けのポイント」(圓尾隆典)論文中、**図2**(414頁)および**図3**の説明文あるいは本文(415頁)において、『早期食道癌、ないし咽頭早期癌』と記載していますが、これは比較的早期の食道癌や咽頭癌が発見できることを述べたものでした。

しかし、食道癌取扱い規約(第10版, 2007, 金原出版)の早期食道癌の定義からは問題となると考え、いずれも「早期」を除き、それぞれ『食道癌』『咽頭癌』と訂正させていただきます。

(大阪赤十字病院消化器科 圓尾隆典)

a|b

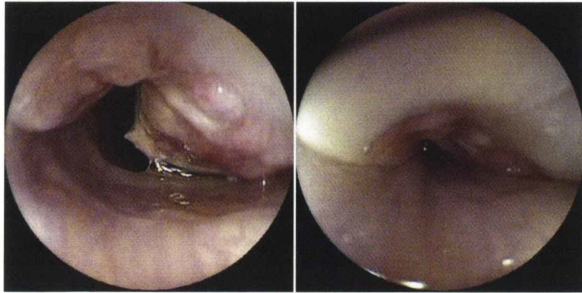


図 2 食道入口部癌例
a. 腫瘍の中心部 b. 咽頭との境界部

a|b

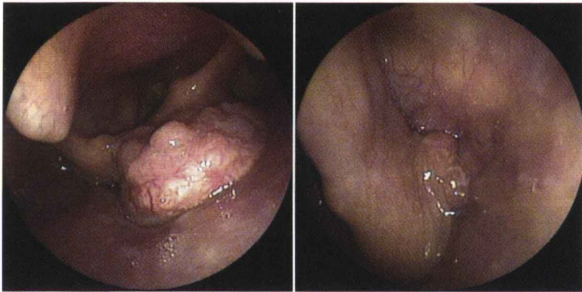


図 3 咽頭早期癌
a. 下咽頭癌 b. 右梨状窩の早期癌

(誤)

では得られにくいメリットである。筆者は、中部食道癌の内視鏡治療後の経過観察中に頸部食道に発生した早期食道癌を診断し、色素内視鏡と鉗子生検が施行可能であった症例を経験している(図2a, b)。近年では、咽頭の早期癌診断が話題となっているが、経鼻ルートであればより容易に診断できる可能性がある(図3a, b)。

(正)

では得られにくいメリットである。筆者は、中部食道癌の内視鏡治療後の経過観察中に頸部食道に発生した食道癌を診断し、色素内視鏡と鉗子生検が施行可能であった症例を経験している(図2a, b)。近年では、咽頭癌の診断が話題となっているが、経鼻ルートであればより容易に診断できる可能性がある(図3a, b)。

図 3 咽頭癌 b. 右梨状窩の癌